

青山教会会報

死から生み出された実り」

イザヤ書九章一〜五節

コリントの信徒への手紙一

十五章二〇〜二六節

牧師 増田将平

今朝の礼拝堂には教会学校のみなさんが持つてきた果物が置かれています。これらはすべて神様が私どもにくださった実りです。「収穫感謝礼拝」はアメリカで始まりました。今から三百年ほど前にイギリスから船に乗ってアメリカにたどり着いた人たちが、最初の秋に最初の収穫を神様に感謝しました。

私どもに与えられているもう一つの実りがあります。果物でも野菜でもありません。それはイエス様です。もうしばらくするとクリスマスです。礼拝後に教会学校のみなさんとクリスマスの飾り付けをします。私どもは毎年クリスマスをお祝いしていますが、何のためにイエス様はこの世界にお生まれになったのでしょうか。

うか。イエス様は神様です。神様であるお方が、わざわざマリアのお腹からお生まれになったのはなぜでしょうか。その答えがイザヤ書九章五節に記されています。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた」、「わたしたちのために」。これが答えです。

みどりごイエス様は成長し十字架につけられて殺されました。そして墓に葬られました。すべての人が、いつかは死んでお墓に葬られるのと全く同じように。死はすべての生き物の終わりです。可愛がった犬も猫も死んでしまえばもう二度と会うことはできません。私どもの家族もそうです。

しかし、イエス様はお墓に葬られてから三日目に、お墓の中から出てこられました。復活なさったのです。今から約二千年前の日曜日の朝のことでした。それ以来、教会は日曜日の朝に集まって礼拝をするようになりました。

八月最後の土曜日に教会学校で初めて教会を会場にデイキャンプをしました。天地創造の話と神様が造られたアダムとエバの話を学びました。二人は神様から

たくさんの実りを与えられていました。二人が住んでいた場所の名前は「エデン」、「喜び」という意味です。たくさんの木の実がエデンにはありましたが、その中で一つだけ神様から食べてはいけないと言われていた木の実がありました。

ある時蛇がどこからともなく現れて言いました。「エバさん、あの木の実が気になるでしょう。食べたなら死ぬと神様は言ったけれど、本当は死にはしません。食べると神様のようになるのです。何が正しくて何が悪いか、自分だけで決められるようになるのですよ」。エバは蛇の言葉を聞いて思いました。

『どうしようかな。神様は食べてはだめと言われたけれど。でも、神様みたいなれたらどんなに素敵でしょう。もう神様の言うことを聞く必要もなくなるし、何でもしたいことができるのだから！』

そしてあの木の実を食べてしまいました。食後にあれほど仲が良かった二人が自分を隠し合うようになりまし。やがて神様が近づいて来ると二人は隠れました。神様に「なぜ食べたのか」と問われると、アダムは言いました。「悪いのはエバです。僕ではありません。そしてエバをわたしのところに連れてこられた神様、あなた

にも責任があるのではないでしょうか。一方でエバは「悪いのは蛇です。」と言います。まさしく蛇が言ったように、二人は自分を中心にして何が悪くて何が善いかを決めるようになりました。いつでも正しいのは自分で悪いのは他人なのです。二人は神様からエデンの園を追い出されました。エデンは喜びの園であったのに、自分たちで神様がくださった喜びを台無しにしてしまったのです。

先ほど「小鳥たちは小さくても」という歌詞がありました。「悪いことは小さくてもお嫌いなさる神様」わたしたちがしている悪いことは、小さいことも、大きいことも、中ぐらいのこともすべて神様の目には見えています。「目が開けて神のようになれる」と蛇は言いましたが、事実はその逆で二人は光を見失い、闇の中に生きる者となったのです。

「闇の中を歩む民は、太いなる光を見死の陰の地に住む者の上に光が輝いた」。この光とはイエス様のことです。もしも、イエス様が私どものところに来てくださらなければ、私どもはアダムとエバのようにならねばならなかったのです。闇の中を生き、死なねばならなかったのです。

しかし、イエス様は闇の中に輝く光です。イエス様がこの闇の世の中にお生まれになったのは、私どもがどうしても勝つことができない最強の敵「死」と戦うためです。どんなに強い人も若い人もいつかは死にます。私どもはアダムとエバのように神様に背き、罪を犯しています。罪を犯した者は神様によって裁かれなくてはなりません。しかしもはや死を恐れる必要はなくなりました。私どものためにイエス様が私どもの罪を背負って死に、死に勝利して復活されたからです。

クリスマス前の季節を指す「アドベント」というラテン語の意味は「到来」です。クリスマスはイエス様の最初の到来です。イエス様はもう一度この世界に来てくださいます。その日、その時は誰も知りません。ただ神様だけが知っておられます。その日、イエス様はクリスマスMASの時のように赤ん坊としてではなく、王として来られます。世界の王として来られるイエス様の歌を聖歌隊がクリスマスMASの礼拝で歌います。「ハレルヤ・ユーラス」です。この歌は英語でイエス様がどのような素晴らしい王であるかを歌います。「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」その日、イエス様は最後の戦

いを始め、この世界を救ってくださいます。その時に死を完全に滅ぼしてくださいます。その日はもはや戦争もテロもありません。イエスさまが世界の平和の君となるからです。この終わりの時の様子についてヨハネの黙示録は二一章で記しています。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである」

イエス様は復活して私どものために「初穂」となってくださいました。死から生み出された最初の実りです。「新米」のように今年最初の実りではなく、世界で初めての実り、絶対にありえない場所から生まれた実りです。最初の実りですから、その後には続く実りがあるのです。その後には続く実りとは私どもです。私どもも復活するのです。この後で歌う讚美歌二一の五七五番の歌詞の通りです。

「命の終わりは命のはじめ。恐れは信仰に死は復活に。ついに変えられる永遠の朝。その日その時をただ神が知る。」
(十一月二二日収穫感謝合同礼拝説教)